

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：16401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580036

研究課題名(和文) 沖縄における録音・レコード音楽の黎明期研究 田辺尚雄の沖縄現地調査を起点として

研究課題名(英文) Study of Incunabula of Recording Music in Okinawa: Beginning with Hisao Tanabe's Okinawa Field Survey

研究代表者

高橋 美樹 (TAKAHASHI, Miki)

高知大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：30403869

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本における民族音楽研究のパイオニア・田辺尚雄が1922年に実施した「沖縄・八重山諸島音楽現地調査」について、沖縄で準備に奔走した人々や田辺が残した記録を分析し、調査の全体像を明らかにすることにある。沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」には、沖縄調査に関する文献、楽譜、レコード等が所蔵されている。田辺の著書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』と田辺文庫の資料を照合し、受け入れ側と調査する側、双方の意図と成果を読み解いた。その結果、調査は田辺の研究者としての責務と、日本本土、つまり 外向き に音楽を発信する機会を得た沖縄の研究者の目論みが複雑に絡み合いながら実施されていた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study is to research and analyze the “Okinawa and Yaeyama Islands musical field survey” conducted by Hisao Tanabe, the pioneer of ethnic music study in Japan, in 1922. The survey, consisting of sheet music and other documents of the Okinawa investigation, is housed in the “Tanabe Library” at Okinawa Prefectural University of Arts. It was accepted after analysis of the investigation results of “Expeditions in Micronesia, Formosa and Ryukyu” (a monograph by Tanabe) by the Tanabe Library. Though there were complications concerning a scheme by Tanabe’s researcher in Okinawa and the opportunity to provide audiences in mainland Japan with Okinawan music, an investigation was begun.

研究分野：音楽学

キーワード：田辺尚雄 沖縄 民族音楽調査 レコード 録音 沖縄民謡 琉球古典音楽

## 1. 研究開始当初の背景

本研究で取り上げる田辺尚雄は、日本で初めて民族音楽研究のための現地調査を実施した人物である。1920年代～1930年代にかけて、朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州を精力的に調査し、後に著書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』(1968)を刊行した。著書の中で田辺は1922年の沖縄滞在中に、琉球王府時代の王家に伝わる古楽器を鑑賞し、琉球古典音楽や沖縄民謡、琉球舞踊の試演会を批評している。また、沖縄本島や八重山諸島で聴いた音楽・舞踊の概説に加え、寄贈を受けた楽器、楽譜、文献、個人的に購入した写真、SPレコードについても詳細な記録を残している。この旅行記の最大の特徴は、沖縄調査を勧めた人物、現地で田辺を案内した人物、音楽を解説した人物、演奏家、舞踊家に至るまで、調査で関わったほぼ全ての人物について記録している点にある。

田辺の朝鮮調査の研究は(植村幸生 2000、山本華子 2011)、台湾調査の研究は(植村 2003)、樺太調査の研究として(篠原智花・笹倉いる美 2007、2008)がある。植村は朝鮮における伝統文化の研究と政治との関わりを理解するため、田辺の現地調査を再検討した。山本は田辺の朝鮮調査が研究、啓蒙、交流という点において現在まで影響を及ぼしていることを指摘したが、沖縄においても1922年の現地調査が同様の影響を及ぼし、音楽史上最大のエポックメイキングとして位置づけられる。しかし、田辺の沖縄調査に関する研究は未だ着手されていない。

筆者は、沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」に田辺の沖縄調査に関する音源・レコード・文献・楽譜等が保管されていることを発見した。2002年に寄贈されて以来、これまで研究者に注目されてこなかった田辺文庫を活用することにより、沖縄音楽のレコード文化史に新しい知見を導き出すことができると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、田辺尚雄が1922年に実施した「沖縄・八重山諸島音楽現地調査」を起点として、近代沖縄における録音・レコード音楽の成立を明らかにすることである。

田辺の著書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』による沖縄調査の記録を、従来のように「旅行記」として捉えるのではなく、「音楽のエスノグラフィー」として再構築することが本研究の独創性である。人々がどのように演奏、創造し、どのように受容しているか、また音楽が他文化社会にどのような影響を与えているかという視点から、旅行記を再構成する。さらに、「田辺文庫」の資料と照合することによって、より詳細な「音楽のエスノグラフィー」を描くことが可能となる。

また、田辺の沖縄調査がレコード産業の黎明期に実施されたことをふまえて、(1)レコード会社による商業録音、(2)学術調査による

フィールド録音、という同時代的な録音技術の実態を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 【準備段階】

田辺の日本・アジアにおける民族音楽調査とその成果を把握するために、田辺が執筆した著書、論文、レコード解説書等、文献資料の収集と整理を行った。

### 【第一次調査】

田辺の1922年沖縄調査の全容を把握するため、沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」において資料収集・整理を行った。さらに、著書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』による現地調査の旅程、行動、聴取した音楽に関する記述と「田辺文庫」資料との照合を実施した。今回対象とした「田辺文庫」の資料と収集方法は以下の通りである。

(1) 琉球古典音楽、沖縄民謡のSPレコード(50枚)

①レコード・レーベル、歌詞カードの写真撮影

②レコード会社別・ディスコグラフィの作成

(2) 沖縄調査に関する文献資料の写真撮影

①歌詞・楽譜資料(45枚)

②フィールド調査記録

③沖縄音楽、琉球舞踊、楽器に関する写真

④田辺と研究者、演奏家、舞踊家間の書簡

⑤沖縄・八重山諸島の地図資料

### 【第二次調査】

田辺が日本・アジアの音楽を研究調査した結果、沖縄の音楽をどのように位置づけ、評価していたのかを把握した。国立劇場「田辺尚雄・秀雄寄贈資料」において資料収集・整理を行った。特に、田辺の著書『日本音楽の研究』(1926)、『東洋音楽論』(1929)、『東洋音楽史』(1930)、『東洋音楽の印象』(1941)、『大東亜の音楽』(1943)等に関わる資料に焦点を当てた。今回対象とした資料と収集方法は以下の通りである。

(1) 日本の伝統音楽、日本民謡、東アジアの音楽に関する文献資料(写真撮影)

①歌詞・楽譜資料

②フィールドノート

③演奏家、楽器に関する写真

④田辺と研究者、演奏家、舞踊家間の書簡

⑤新聞記事に関するスクラップブック

⑥ラジオ放送に関する文献資料

⑦演奏会、展示会、レコード広告に関するポスター

## 4. 研究成果

(1) 沖縄調査中止から実施に至った経緯

田辺は当初、1922年3月～4月に実施した台湾音楽調査の帰りに、沖縄県の八重山諸島に立ち寄り、調査する予定であった。しかし、台湾・基隆発、八重山諸島行きの船便が不定期で10日間以上待つ必要があり、やむを得ず八重山調査を中止し帰京した。一方、沖縄では田辺を迎える準備が着々と進められていた。中でも、田辺の教え子で沖縄音楽研究家の山内盛彬は、調査で披露すべき沖縄音楽のジャンルや曲名について、1922年4月30日「田辺尚雄氏歓迎音楽会演奏者の方々へ」『沖縄タイムス』紙上にて提案していた。

調査中止の一報を受けた沖縄の人々は、調査の再実施を熱望する手紙を田辺宛てに数多く送った。さらに、八重山民俗研究家の喜舎場永珣は1922年5月に東京の田辺の自宅を訪問し、八重山民謡の素晴らしさを説いた。このように調査を強く勧める沖縄側の姿勢が伝わり、田辺は1922年7月に沖縄調査を実施することを決めたのである。

#### (2) 田辺における沖縄調査の目的

田辺は沖縄音楽に保存の価値があるかどうかを判断するため、調査を実施した。そして、個々の音楽については録音技師を派遣して録音作業を経た後、完成させたいという意図があった。つまり、最初から専門的に深く掘り下げる調査を目的としておらず、その後の研究は他の研究者に委任したいという、受け身の姿勢で調査に臨んでいた。また、日本民俗学者の柳田国男が八重山民謡を賞讃していたことから、「八重山における世界的民謡を調べる」(田辺尚雄1922年9月24日「(1) 世界一の民謡を持つ八重山」『東京日々新聞』)ことも主眼の1つであった。

#### (3) 田辺が購入したレコード

田辺是那覇市にて大阪蓄音器(ナショナル・レコード)のSP盤5枚を購入している。このSPは1915年に沖縄音楽初の商業目的に制作販売されたレコードであり、沖縄で現地録音された(高橋美樹2011参照)。田辺は「オリエンでも近頃これを多数吹込んで居て、それを那覇市の森楽器店で売って居る」(1923年2月『音楽と蓄音機』10巻2号)と記したが、大阪蓄音器は1917年に東洋蓄音器(オリエンレコード)に併合され、原盤のほとんどを移籍していた。そのため、田辺は「オリエン」と記述したのであろう。

#### (4) 田辺が録音した音源

①田辺持参の写声蓄音器に録音した演奏家・曲名は以下の通り。

実施日：1922年7月28日。

歌・三線：城間恒有《揚作田節》

歌・三線：伊差川世瑞《干瀬節》

歌・三線：富原盛勇《宮古ン子》《テマド節》

②岩崎卓爾所蔵の写声蓄音器を借用して録

音した曲名は以下の通り。

実施日：1922年8月2日

《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》

#### (5) 録音音源の再生・公開

1923年「啓明会 第8回講演」にて上記の(4)①琉球古典音楽、沖縄民謡数曲と(4)②八重山民謡1曲を蓄音器で再生した。

なお、(4)②《ジラバガヌ・ソウ・ジラバ》はLP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(1978年、TW-80011、東芝EMI)に収録されている。

#### (6) まとめ

①1922年の沖縄調査は、沖縄側で準備に携わった人々が企画した演奏会、歓迎会をそのまま受け入れる形で進められた。田辺の研究者としての責務と、日本本土＝〈外向き〉に音楽を発信する機会を得た沖縄の研究者の目論みが複雑に絡み合いながら調査が実施された。田辺の沖縄調査は、沖縄にルーツをもたない人々や社会に向けて、いかなる音楽を発信し得るかという課題を沖縄の人々に突きつけた。

結果的に、「東京＝日本の中央」に音楽を発信する新たな志向が沖縄社会に導入された。よって、田辺の沖縄調査は〈外向き〉発信スタイルの起点として位置づけられる

②田辺は最終的にレコード技師を派遣して個々の音楽を録音し、レコード制作することを目指していた。八重山民謡を現地で実際に聴くことが調査の主眼であった田辺にとって、琉球古典音楽や沖縄民謡は研究対象として最優先される音楽ではなかった。調査中に大阪蓄音器からレコード発売されたSPを購入することで済ましている。

実際に調査から4年後の1926年、八重山民謡レコード(23枚)が日東蓄音器(ニッター・レコード)において制作された(高橋美樹2010参照)。プライベート盤として録音・制作された八重山民謡レコードが、田辺における八重山民謡研究の完成版であったと結論づけられる。

高橋美樹、2010年「近代沖縄における録音メディアの導入 —ニッターレコード制作の八重山民謡SP盤を対象として—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』22号、pp.91-122。

高橋美樹、2011年「レコードに初めて録音された沖縄音楽 —1915年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71号、pp.229-242。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計1件）

高橋美樹、2016年「日系新聞にみるブラジル  
沖縄系移民のレコード制作 —1930年代～  
1950年代を中心として—」『高知大学教育学  
部研究報告』76号、査読無、pp. 189-208

〔学会発表〕（計1件）

高橋美樹、2015年11月1日「田辺尚雄の沖  
縄・八重山諸島音楽現地調査（1922年）—  
「田辺文庫」を基礎資料として—」東洋音楽  
学会第66回大会、東京藝術大学（東京都台  
東区）

〔図書〕（計1件）

高橋美樹、2016年「沖縄・日本本土・ブラジ  
ルを越境・還流する沖縄音楽レコード」根川  
幸男編『越境と連動の日系移民教育史 —複  
数文化体験の視座』ミネルヴァ書房、総ペー  
ジ数488

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 美樹 (Miki TAKAHASHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教  
授

研究者番号：30403869